

The Tsukuru

創

12 2021
December

街の書店が消えてゆく
書店が生き残る道は…
独立系書店の新しい動き
障害者施設の内部告発
「死刑囚表現展」の作品
なお続く「三浦春馬現象」
原一男監督が描く「水俣」
【連載】香山リカ／森達也／雨宮処凛／他



「ソウルドラマアワード2019」での三浦春馬さんと韓国ドラマのイメージ(切り絵:海原アラジン)

書店とコミュニティ すべての書店は、地元の本屋である

コミュニティを失った地で、書店が生き残ることは難しい。

「街の書店が消えてゆく」中で何とか踏みとどまるために、

「すべての書店は地元の本屋である」と提唱したい。

トークイベントのテーマは
「書店とコミュニティ」

縁あってはくは、年に一度阪南大学流通学部森下信雄ゼミで、出版や書店に関わる「特別講義」を行っている。3年前、15人のゼミ生に出版や書店の現状を話して欲しい、と森下准教授に頼まれ、はくが二つ返事でOKして始まった。

出版・書店業界の人たちは、「人は本を読むべきだ」という前提で仕事をして

いる人が多く、なぜそうなのかを語ったり、考えたりすることもない。そして業界全体の売上減の元凶を、人々の、特に若い人の「読書離れ」に求め、ただそれを嘆き、批判している。他業界の人たちは、自分たちがつくり売っているものが如何に素晴らしく有用なものであるかを消費者に伝えることに必死になっているのに、わが業界の人たちには、そうした姿勢が感じられないのだ。

だから、本を読むことは快楽であり有

用であるということ、そう信じているはく自身が、本を読まないと言われている若者たちに向かって訴える機会を持ちたいと思っていたのである。「バックヤードかどこかで」という森下の依頼は即座に断り、「店内でトークイベントの形にしましょう」と提案した。15名の学生を収容できる場所がバックスペースには無いのが物理的な理由だが、はくにはもう一つ目論見があった。学生たち以外の人にも、話を聞いてもらいた

かったのだ。出版社や作家など本に関わ

る仕事をしている人たちにも「参観」してもらいたかったし、たまたま来店したお客様にも聞いてほしかった。通路横のオープンスペースで行うジュンク堂書店難波店のトークイベントでは、それが容

易だったのだ。

実際、業界人も一般読者も何人か参加してくれ、大阪の出版社に勤める女性は、仕事への熱い思いを語ってくれた。

新著のトークイベントのために来阪していた作家の石橋毅史には、直接参加を依頼した。彼は快く参加してくれ、以前勤めていた出版業界紙「新文化」に、イベントの様子を書いてくれた。

「どこまで伝わったかはわからない。こちらから見る限り、学生の表情は一樣にボンヤリしていた。授業を受ける学生とは、得てしてそんなものである。だが福嶋氏は熱意を込めて果敢に語り続けた。

彼らの心に何かひとつでも残そうと、資料を配り、本や書店の魅力を多角的に紹介していた。それは、最前線の現場にいる本屋の「いま」を象徴する姿でもあった。「本屋の「いま」とは、「人は本を読むべきだ」という前提が崩れた本屋の「冬の時代」を言うのである。」(※1)

3回目の今年(昨年はコロナ禍による緊急事態宣言で休止)、森下から依頼されたテーマは「書店とコミュニティ」で

あった。ゼミ生たちがそのテーマでレポートするに相応しい書店も紹介してほしい、という。

はくは、喜んだ。何年か前から「器の大小にかかわらず、全国チェーンも独立系も、すべての書店は、地元書店である」と提唱しているはくにとって、「書店とコミュニティ」は、最も重要なテーマだ。店の規模や立地によってその大小や形状はさまざまだが、書店は必ず自らの商圏を持つ。その商圏内のコミュニティとの関係の強さこそ、書店の存在感の大小を決し、存続の可否を決定するからだ。

取材先に相応しい書店も
すぐに頭に浮かんだ

ゼミ生たちの取材先に相応しい書店も、すぐにいくつか頭に浮かんだ。

まず、神戸市須磨区、山陽電鉄板宿駅

福嶋聡●1959年、兵庫県生まれ。82年ジュンク堂書店に入社。池袋本店副店長などを経て難波店に。著書「劇場としての書店」「書店と民主主義」など。



ジュンク堂書店難波店の店内風景

前の「井戸書店」。店主の森忠延は、売れる「物」は何かと追いかけるのではなく「人」を追いかけていこうと、この地域に住んでいる人が何を読みたいかを考えて本を置く。そのために、商店街の役員を積極的に引き受け、常に皆が何に困っているのかを知り、それに応える本を仕入れる。更に書棚を可動にし、広くない店内に30名収容のスペースをつくり、「店のメインの棚」である「人間学」の本を参加者とともに読み話し合う「大人の人間学塾」を開催、街の人が子どものマナーの問題を話しているのをヒントに始めた「子ども論語塾」は、100回を数えるという。コミュニティに資する地域の人々のための汲み尽くせぬ「井戸」である。(※2)

兵庫県尼崎市・JR立花駅北側の商店街の外れにある小林書店の小林由美子は、「雨の日も風の日も休むことなく誠実に働いてきた両親」が積み上げてきた店の信用を何よりも大切にしている。「お客さんが買ってよかったと思えるものだけをきちんと説明して売らなアカン」と、

ひとりひとりの常連客に商品について丁寧に説明、いわゆる「企画もの」の予約を積極的に取り、時に全国でもトップレベルの成績を収めてきた。書店仲間と声をかけ、協働して予約を積み上げていくという試みも成果を収めている。「コミュニティに定着した書店」であると共に「書店のコミュニティをつくる」書店でもある。(※3)

大阪府豊中市蛸池に、昨年6月、本も売る調剤薬局がオープンした。「薬局に本を置くことで、偶然の出会いを提供したい」と構想・開店した薬剤師瀬迫貴士は、「人生が変わるような1ページに出会ってほしい」と、店を「ページ薬局」と名付けた。調剤を待つ間読み聞かせをする親子、薬を受け取るついでにいつも本を買っていく客を見ながら、瀬迫は手応えを感じている。思えば調剤薬局は、その地域の人が「いつも」「ずっと」ではないにせよ必ず訪れる場所であり、そこに並べられた本は、知らず知らずのうちにコミュニティに深く浸透していくに違いない。

大阪市谷町六丁目駅前の隆祥館書店の二村知子は、「私たちは、書店として自信を持ってお薦めしたい本を仕入れて、責任を持ってお客様に売って行きたいのです。今後も地域のお客様にとってかけがえの無い書店になるべく努力していきたいと思っています」と宣言する。

知子の父であり、先代の店主である父善明は、苦境に陥ったとき、廃業の淵に立たされている町の書店にとって、最後の望みは長年にわたって自分たちを支えてくれている「顧客」の存在だと考えていた。

共感する著者呼び、積極的にトークイベントを打つことでも有名だ。関西電力が持つビル内の会場に小出裕章を呼んで「反原発」のトークイベントを開催したとき、町会長の許に関西電力の社長室の人間が飛んできたという。「ほんで、『ああいいう講演会で使われるのは困る』言いはるから、うちも言い返したんや。『それはほんまのことやんか。あんたらも一緒に聞いて勉強したらええやんか』って」と、町会長は語る。

イベントには、東京など遠方からもファンが参加する。隆祥館書店の「コミュニティ」は、「地域限定」ではない。(※4)

そして、大阪市北区堂島の「本は人生のおやつです」の坂上友紀。紙、デジタルを問わずいくつもの媒体で本や本屋の紹介をする彼女は、穏やかな空気に満ちた根城でも、読書相談に来た人たちと時間を惜しむことなく話し、一人ひとりにあった本を紹介する。薦めた本をすべて購入して帰る人も多い。評判を聞いて次々と新しい客が訪れるというから、彼女の「カウセリング」と選書は的確なのに違いない。満足した客は、当然常連となる。遠方から通う人もいるし、最近では若い人も少なくないという。小さな本屋から、本を介した一つのコミュニティが、確実に生まれているのだ。そのコミュニティは、もはや地域とは直接結びついていない。(※5)

意志と矜持を持った「本屋」がいる限り…

石橋毅史は、「本屋がアジアをつなぐ

自由を支える者たち」(ころから)で、アジアのコミュニティを報告している。2017年に国内の原子炉を25年までに全廃することを決めた台湾では、反核フラッグを掲げる書店が「本屋は町なかの党外人士」と誇らしげに言う。韓国では、光州のノクドウ書店やソウルのクナリオミョンやブルムジルといった書店がいかにかに80年代以降の民主化運動を支えたかが、今も語り継がれている。

最後の2章で石橋がインタビュしてある林榮基は、香港銅鑼灣書店時代、大陸の顧客に中国の体制批判のものも含めた本を通販で販売していた。2015年に当局に拘束され、解放時に顧客リストの提供を求められるが拒否、インタビュ後の2020年、台湾で再び書店を開く。移動しながら発信する林が形成するコミュニティは、地理的に無限定、不可視である。

「私は運動家ではない。ただの、町なかの本屋です。でも、中国の人たちに自由になってほしいと思っている本屋ではある」(林榮基)

意志と矜持を持った「本屋」がいる限り、本を触媒とし、書店を核としたコミュニティは、広がっていく。

このテーマを選んだ森下信雄自身が、今すべての商売にとって、コミュニティを創造していくことが重要だと知っているのだ。元宝塚劇場支配人として、「タカラヅカ」を100年以上にわたって存続させてきたのは、底流に流れる「コミュニティビジネス」の思想だということを知悉しているからである。

宝塚歌劇経営にはマネージャーは存在しない。否、置く必要がないのである。なぜか？ その答えは「ファンクラブ」の存在である。劇場空間から一步出れば、極論すれば興業主主催者は「スター」の行動に間接しない。その任を担うのは「ファンクラブ」のスタッフである。「ファンクラブ」にとって、スターのプライベートを「独占」し、仲間内で共有することが最大のメリットだから、それを「一般に広く開示するわけではない」というわけだ。他が羨むコストカットの手法を支えているのは、「ファンクラブ」という

強^{きようじく}なコミュニティなのだ。(※6)

ジュンク堂書店那覇店店長の森本浩平は、『新文化』2020年9月9日号の一面に「県産本^{ケンサンホン} 育む沖縄の出版事情」という文章を寄せ、沖縄独自の出版文化を語っている。他の県と風土が全く違うため、沖縄ではほぼすべての業界で地元企業が主となっている。

それは出版業界においても同じであり、独自の発展を遂げた書籍は「沖縄県産本」と呼ばれ、沖縄県内だけの流通で成り立っている。例えば本土で出版されるガーデニングや家庭菜園の本は春夏秋冬が違ふのでまるで役に立たない。冠婚葬祭のルールも県外とは違ふので、それに沿った本が必要で、沖縄のしきたりについて書かれた『御願ハンドブック』(ボーダーインク)は県内で14万部も売れているという。100社を超える出版社の本を流通させる県内取次もあり、それに書店、読者を加えて独自のコミュニティを形成している。そのコミュニティの力が、沖縄版・広辞苑『沖縄百科事典』(沖縄タイムス社 22万円

も今なお頑張っている地方出版社がいくつもあるとはいえ、総じて「本土」では、出版業の東京一極集中化が進んできた(1976年、地方出版物の流通拠点として地方・小出版流通センターが設立されたのも、地方出版が徐々に衰退していくことへの危機感の現れと言える)。近年、大手出版社や取次の支社の廃止・縮小も進んでいる。交通網の発達に続いて、業務「効率化」のためのIT化がそれを求めている。

コミュニティを失った地で書店が生き残ることは難しい

だが、取次支社の店売(小売店が直接買い付けを行える倉庫)の廃止により、地方書店の客注対応は大きな支障をきたしている。地方出版社の商品を同じ地方の書店に送品するのに一旦東京に送らなければならぬという「効率化のための非効率」も生じている。

出版業界に限ったことではない。多くの業界で本社機能の東京移転が進み、地方から東京への人口流出に拍車をかけた。

1983年)を県内で3万部も売り上げてきたのである。

沖縄県に生まれた独自の出版コミュニティ

沖縄県に独自の出版コミュニティが生まれたのは、風土文化の違いだけによるのではない。森本の文章は、もう一つ重要な要因を示唆している。

「本土の出版社が刊行する書籍に話を移すと、沖縄への運搬はすべて船便であり、基本5日遅れで入荷する。台風シーズンになると、波が荒れて舟が欠航するから、さらに遅れることが当たり前の日常になるという。沖縄の読者も遅れることを常識的に認識していて、商品の遅れによるクレームも殆ど無いらしい。

「内地」の出版流通業は、雑誌の刊行日一斉発売、書籍も全国ほぼ同時発売を誇ってきた。それは、明治初期に始まった出版流通の近代化が、一気に全国に広がった鉄道網の発達と並行し、その運搬力を利用出来たからである。鉄道側では出版物への割安運賃も適用した(定期的に

運搬しやすい荷物がまとまった量扱える鉄道側のメリットもあったかもしれないが、初期の割安運賃が、トラック輸送が主流になっても出版輸送費を抑え、今日の出版輸送危機を招いたという指摘もある。(※7)

だが、忘れてならないのは、そうした鉄道網の加速的な拡大は、日露戦争のための兵士輸送が要請した国家政策だったことだ。国内の鉄道網は、海外侵略への助走路であり、太平洋戦争中に取次を統合して出版流通を独占する日本出版配給株式会社(日配)という国策会社がつくられたことを見ても、国家権力が出版物を自らの統制下に置こうとした意図が初期の出版輸送の優遇にも垣間見えると言っても、穿ちすぎではあるまい。

敗戦後も「世界に誇る」新幹線をはじめとした鉄道網の整備は続き、それは地方の利便性ではなく、人口流出による地域コミュニティの弱体化を結果した。

海の彼方、線路の延びようのない沖縄県に、独自の出版コミュニティが発達したことは覚えておきたい。沖縄県以外に

双方向での利便を謳^{うた}う鉄道網の発達は、地方→東京という一方向の流れを加速し、地域格差を充^{こう}進^{しん}していく。「地方崩壊」があちこちで叫ばれるようになった。東京との「距離」が短くなればなるほど、東京との結びつきが強くなればなるほど、地方は弱体化していったのである。

沖縄には東京と線路を繋ぐ手立てがない。海に断ち切られて出版物の到着の遅れが常態であることが、独自の出版コミュニティを生んだ。他産業でも、おそろく同様のことが起こった。

利便性や効率、スピードの追求は、コミュニティの繁栄ではなく、衰退を促す。それらを追求し、成果を回収するのが国家や大資本であるからだ。そのことに気づかず、利便性・効率・スピードに幻惑され、それらに身を委ねる者は、多くを国家や大資本に「お任せ」し、自ら動き自ら考えることを止めてしまう。そうして、国家の中心であり大資本が集中する東京に人も財も吸収され、地方は衰退し自らコミュニティを破壊していく。

コミュニティを失った地で、書店が生

き残ることは難しい。本は、自ら動き自ら考える人が求める商材だからだ。「街の書店が消えてゆく」中で何とか踏みとどまるために、「すべての書店は地元の本屋である」と提唱するのは、それゆえである。

※1「新文化」2018年7月19日号「本を読まない社会と対峙する本屋」

※2「ほんまに」Vol.20「特集 本を売る」(くとうてん)

※3「仕事で大事なことはすべて尼崎の小さな本屋で学んだ」(川上徹也 ポプラ社)

※4「13坪の本屋の奇跡」(木村元彦 ころから)

※5「本は人生のおやつです」は、今年12月に、兵庫県朝来市に移転の予定(朝来でのオープンは、来春)。場所を移しても「本おや」コミュニティは健在だろう。

※6「宝塚歌劇団の経営学」(森下信雄 東洋経済新報社)

※7「新文化」2021年7月1日号 岩野裕一「物流協力」はイノベーションで